



国語の力

—考える力を育むことばの教育—

お茶の水女子大学副学長 内田 伸子^{うちだ のぶこ}

「現地の学校に長くいる子どもの方が、日本語補習校で作る作文がうまいという現象がありました。それは言語能力というものが、単に〇〇語の熟達ということだけでなく、文化を継承する努力によって自己の内面を耕すという、人間に共通な性質をもっている、第二言語と格闘している子どもの方がそういう能力が高いのだという気がしています。だからといって、日本で第二言語を早期に教えるべきだというのは決してありません。そうではなく、日本でなされている国語教育がいささか頼りないと思うのです。帰国後に受けた中学、高校の授業では、自分自身の変革を迫られたり、中身をしばらく出させられたりするような体験には不幸にして出会えませんでした。」(※1)

これは、三歳十か月から十五歳まで旧西ドイツに滞在した帰国子女のレポートの一部である。筆者の「発達心理学」の授業では、授業についての疑問やコメントなどを書いてもらう三分間作文を課しているが、第二言語学習について取り上げた日、この学生は「思いがあまりすぎてとても三分間では書けない」と言い、一週間後にA4版レポート用紙十五枚が提出された。十一年半ドイツで暮らしても「とうとう一度もドイツ語を自由に

使えたことはなく、高学年になるほどその不自由さは増しました。」という書き出しで始まる文章は日本の国語教育についての痛烈な批判で締めくくられている。彼女が指摘しているように、「自分自身の変革を迫られたり、中身をしばらく出させられたりするような体験」が国語教育で与えられるであろうか。

教育課程改訂のキーワードとなった「生きる力」とは、課題を発見し、課題を解決する能力を指している。戦後から続いた偏差値主義教育の中では答が一つ、答にいたる思考経路も一本という収束的思考力(暗記能力)が大事にされてきた。しかし、人が人生で直面する課題は答が決まっていることは少ない。答が一つとは限らず、答にいたる思考経路も一つだけとは限らぬ課題に答を出すことができる「拡散的思考力」、すなわち、考え、想像し、創造することこそが大切である。二〇〇四年の新聞各紙には「高一生の学習到達度、三年前比、日本下がる」の見出しが踊り、経済協力開発機構(OECD)による第二回(二〇〇三年)の「国際学力比較調査」(PISA)の結果が掲載された。「読解力」は八位から十四位に、「数学応用力」は一位から六位に下がったという新聞各紙の報道に、当時の中山成彬文部科学大臣は「授業時間数を増やす」「競争を強化する」と述べ、学習指導要領の見直しを表明した。

日本の十五歳は、教師のことばや教科書に書かれたことばを「真実」として受け身的に受け取り、覚えて使うというタイプの学習に慣れている。その結果、自分で考え判断するような力は育たない。PISAの結果は日本の教育で欠けていた面を浮き彫りにすることになった。先達の知を鵜呑みにして受け入れ覚えて使うのではなく、子ども自身の知の変革や新たな知の発見や創造につながるような、生きて働くことばは、どうやった

ら育てることができるのであろうか。

宮城教育大学名誉教授の武田忠氏は、小学校の国語教材と授業のディスコース(談話)構造の分析を行ったところ、教室での授業が「教材の記述内容を確認するだけの学習になっていると指摘している。教師は欠陥のある説明文教材を「事実」として解説する。子どもも鵜呑みにする。教員志望の学生たちに欠陥教材を分析させても、教材の記述は絶対的真実として受け入れてしまい、欠陥があることに気づかないのである。武田氏は、学生たちが小学校以来、教師のことばや教材を受け身的に受け入れる態度で臨んできた結果、対象を批判的に捉える態度が失われてしまっているのではないかと推測している。だから、大学生になった段階では、教材の中の深刻な問題点すら見つけることができなくなっている。(※2)

本当の意味での学びが起るためには「知識をたくさん持っている」ことではなく「知識の意味を捉え、自分の理解の限界もメタ的に捉え、たえず学び直して自分を成長させていく」力こそが必要になる。教科書に書かれた事実や教師の説明のことばを黙って受容するのではなく、疑問をもち問いを発し異議申し立てができなくてはならない。「権威」のことばを黙って鵜呑みにして受け入れるという受身的な知の受容者の立場に甘んじていては、何も新しいものは生み出せない。

生きて働くことばの力を鍛えるためには、自分の思いやイメージを明確にして相手に伝えるという言語活動を媒介にして、ことばを駆使することが必要である。国語、数学、理科、社会などそれぞれの教科でことばをめぐる四つの活動——情報を取り入れ、「聞く」「読む」＋「心内イメージの明確化と表出」「話す」「書く」——を子どもに行わせなくてはならない。ことばを駆使する活動を通して、それぞれの教科の基礎・基本

の習得に留まらず、ことばの力が強化されるのである。

「言語は生活や、その必要や、さまざまな経験から生じる。最初、私の生徒(注…ヘレン・ケラー)の心はまったく空虚であった。彼女は理解できない世界に住んでいた。言語と知識とは固く結びついている。(中略)私は決して言語を教える目的のために、言語を教えたのではない。考えを伝える手段として不断に言語を用いたのである。」—アン・サリバン(※3)

ことばは理性や内省の手段となる。教室の中では、思考を練る手段、理性や内省の道具として生きて働くことばを子どもに向かつて発しなくてはならない。考える手段としての国語の力を子どもたちに習得させ、使いこなせるようにすることが、今、日本の国語教育に求められる課題である。

「引用文献」

- ※1 内田伸子 第2言語学習における成熟的制約——子どもの英語習得の過程——桐谷茂(編)『ことばと心の発達2——ことばの獲得』ミネルヴァ書房(一九九九年)
- ※2 武田忠「学ぶ力をうばう教育——考えない学生がなぜ生まれるのか——」新曜社(一九九八年)
- ※3 アン・サリバン著・榎恭子訳『ヘレン・ケラーはどう教育されたか——サリバン先生の記録——』明治図書(一九七三年)



内田 伸子 (うちだ のぶこ)

1946年、群馬県生まれ。お茶の水女子大学理事兼副学長。専門は発達心理学・認知心理学。文部科学省中央教育審議会国語専門分科会委員、文化庁文化審議会国語分科会委員を務める。大学で教鞭をとるかたわら、NHK教育テレビの幼児番組作りや講演会など多方面で活躍。『子どもの文章——書くこと考えること——』(東京大学出版会)、『想像力；創造の泉をさぐる』(講談社)、『発達心理学——ことばの獲得と教育——』(岩波書店)、『ことばの生まれ育つ教室——子どもの内面を耕す授業——』(監修、金子書房)ほか著書多数。